螢

1 人ざまのわららかにけぢかくものしたまへば（八〇五13・420）
玉に貫き消たず賜らむ秋萩の末わわら葉に置ける白露（万葉集巻八、一六一八、湯原王・古今六帖第六、秋萩、三四八四、「けさでたばらむ…上わゝらはに」）〔拾〕

2 御らうの程はいくばくならぬにさみだれになりぬるうれへをし給ひて（八〇六1・420）
①わびつつも頼む月日はあるものをさみだれにさへなりにけるかな（未詳）〔花〕＜弄＞〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔事〕〔大〕〔集〕
②神代より忌むと云ふなる梅雨の此方に人を見る由もがな（信明集、二〇二〇、をとこ）〔花〕〔休〕、〔紹〕五月雨をこなたになしてあふよしもがな、〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔新〕〔対〕〔大〕〔集〕
③時鳥なく音ひさしくなりぬるはさみだれながら幾よふればぞ（うつほ物語、祭の使）〔花〕〔孟〕〔岷〕
④ためしにも人のひくべきあやめぐさこのさみだれを今もあへなん（うつほ物語、祭の使）〔花〕いまずもあらなん、〔孟〕〔岷〕時鳥（第三句）…いまずもあらなむ

3 声はせで身をのみこがすほたるこそいふよりまさるおもひなるらめ（八〇九11・424）
音もせで思ひに燃ゆる蛍こそなく虫よりも哀れなりけれ（源重之集、一九九七）〔岷〕〔湖〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

4 のきのしづくもくるしさにぬれ〳〵よふかくいで給ひぬ（八〇九14・424）
①東屋の　真屋のあまりの　その　雨そそぎ　我立ち濡れぬ　殿戸開かせ　かすがひも　錠もあらばこそ　その殿戸　我　鎖さめ　おし開いて来ませ　我や人妻（催馬楽、東屋、八）〔拾〕〔新〕〔余〕
②ながめつつ我が思ふことはひぐらしに軒の雫のたゆるよもなし（新古今集巻十六、雑下、一八〇〇、秋雨を　中務卿具平親王）〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

5 よふかくいで給ひぬほとゝぎすなどかならずうちなきけむかし（八〇九14・424）
さみだれにもの思ひをれば時鳥夜ふかく鳴きていづち行くらむ（古今集巻三、夏、一三三、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　紀友則・古今六帖第六、ほとゝぎす、三三八三、友則・友則集、一九五〇、寛平の御時中宮の歌合・寛平御時后宮歌合、三三九〇、友則）〔紫〕〔河〕＜花＞〔細〕〔紹〕〔孟〕〔新〕〔岷〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

6 わが身づからのうさぞかし（八一〇4・425）
わが身からうき世の中と歎きつゝ人の為さへ悲しかるらむ（古今集巻十六、雑下、九六〇、ある人のいはくたかつかの皇子の歌なり）〔釈前〕〔異〕うき世の中をながめつゝ…かなしかりけり、〔釈書〕うき世の中をながめつゝ、〔紫〕うき世の中を、〔河〕〔孟〕〔岷〕

7 けふさへやひく人もなきみがくれにおふるあやめのねのみなかれん（八二10・426）

水隠れて生ふるさ月のあやめ草長きためしに人は引かなむ（続古今集巻三、夏、三六、題しらず　貫之）〔花〕〔休〕〔紹〕〔圭〕、〔屋〕みかくれに、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕

8 あらはれていとゞあさくもみゆるかなあやめもわかずながれけるねの（八二13・426）

郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな（古今集巻十一、恋一、四六、題しらず　読人しらず）〔花〕〔一〕〔休〕〔岷〕（下句ノミ）、〔紹〕〔新〕

9 そのこまもすさめぬ草となにたてるみぎはのあやめけふやひきつる（八三1・429）

①香をとめてとふ人もあるやあやめ草あやしく駒のすさめざりける（恵慶法師集、三六、五月五日めづらしき所にまかりて）〔異〕引く人あるを、〔花〕〔休〕かる人あるを…すさめざりけり、〔紹〕〔圭〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕〔余〕かる人あるを、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

②おふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人のこぬが佗しき（拾遺集巻十二、恋三、七六、題しらず　躬恒・躬恒集、一三三、「こぬがわびしさ」）〔河〕〔拾〕〔新〕〔余〕

③その駒ぞ　や　我に　我に草乞ふ　草は取り飼はむ　水は取り　草は取り飼はむや（神楽歌、其駒、末、〈三〉）〔河〕〔休〕〔紹〕〔圭〕〔余〕

④我が駒の常はすさめぬ菖蒲草引き並べては今日こそは見れ（恵慶法師集、三三九三）〔拾〕〔新〕〔余〕

⑤駒なべてすさめぬ沢の菖蒲草けふに逢はずは猶や刈らまし（元真集、三〇三〇、中夏、五月五日）〔拾〕

⑥大荒木の森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし（古今集巻十七、雑上、八六二、題しらず　読人しらず・古今六帖第二、もり、三九三・同第六、下草、三四三〇・和漢朗詠集巻下、草、四一）〔大〕〔集〕

10 にほどりにかげをならぶるわかこまはいつかあやめにひきわかるべき（八三3・430）

①若駒とけふに逢ひくるあやめ草生ひ後るゝや祭るなるらむ（頼基集、一九四四、五月五日駒くらべする処・和漢朗詠集巻上、夏、端午、一三、頼基、「まくるなるらん」）〔異〕〔岷〕まくるなるらむ、〔河〕〔圭〕〔湖〕けふにあひつる…まくるなるらむ、〈弄〉〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

②大君の　遠の朝廷と　しらぬひ　筑紫の国に　泣く子なす　慕ひ来まして　息だにも　いまだ休めず　年月も　いまだあらねば　心ゆも　思はぬ間に　うちなびき　臥しぬれ　言はむ術　せむ術知らに　石木をも　問ひ放け知らず　家ならば　形はあらむを　恨めしき　妹の命の　吾をばも　いかにせよとか　にほ鳥の　二人並びゐ　語らひし　心そむきて　家離りいます（万葉集巻五、七四四）〔新〕にほどりのふたりならびゐ（一部ノミ）

③大己貴　少彦名の　神代より　言ひ継ぎけらし　父母を　見れば尊く　妻子見れば　愛しく愍し　うつせみの　世の

理と　かく様に　言ひけるものを　世の人の　立つる言立ちさの花　咲ける盛に　はしきよし　その妻の児と　朝夕に　笑みみ笑まずも　うち歎き　語りけまくは　永久にかくしもあらめや　天地の　神こと寄せて　春花の　盛もあらむと　待たしけむ　時の盛ぞ　離り居て　嘆かす妹が何時しかも　使の来むと　待たすらむ　心さぶしく　南風吹き　雪消まさりて　射水河　流る水沫の　よるべ無み左夫流その児に　紐の緒の　いつがり合ひて　鴨鳥の　二人双び居　奈呉の海の　沖を深めて　惑はせる　君が心の術もすべ無さ（万葉集巻十六、三八〇六、大伴宿禰家持）〔新〕

にほどりのふたりならびゐ（二部ノミ）

11 かぞへのかみがほと〳〵しかりけむなどぞ（八一六1・431）

宮造るひだの匠の手斧の音ほと〳〵しかるめをもみしかな（拾遺集巻十九、雑恋、一三六、貞盛がすみ侍りける女にくにもちが忍びて通ひ侍りけるほどに貞盛まうできければまどひてぬりごめに隠して後ろのとよりにがし侍りけるつとめていひ遣はしける　くにもち）〔河〕宮づくりひだのたくみがて、

くみがてふの音、〔紹〕、〔孟〕宮づくりひだのたくみが、〔岷〕〔拾〕

12 女こそものうるさがらず人にあざむかれむとむまれたるものなれ（八一六4・431）

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく（古今集巻三、夏、一六五、蓮の露を見てよめる・僧正遍昭・遍昭集、一八九八、はちすに露のおきたるを、「などかは露を」・古今六帖第六、はちす、三四六九、ヘンぜう・和漢朗詠集巻上、夏、蓮、一八一）〔屋〕

13 あつかはしきさみだれのかみのみだるゝもしらで（八一六6・431）

郭公をちかへりなけうなゐこが打ちたれ髪の五月雨の空（拾遺集巻三、夏、一二六、定文が家の歌合に　躬恒・躬恒集、一四六三、中の夏、「わぎも子が」）〔釈前〕〔紫〕〔河〕〔細〕〔休〕〔岷〕五月雨のころ、〔異〕〔紹〕〔孟〕

14 うつほのふぢはらの君のむすめこそいとおもりかにはか〴〵しき人にて（八一九10・435）

①苔生ふる岩に千代ふるいのちをば黄なる泉の水ぞ知るらん（うつほ物語、藤原の君）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕

②死ぬといはばためしにもせむ物をのみ思ふ命は君がまに〳〵（うつほ物語、藤原の君）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕

15 わがよの程はとてもかくてもおなじことなれとなからむよを思ひやるに（八二〇10・436）

世の中はとてもかくても同じこと宮もわらやも果てしなければ（新古今集巻十六、雑下、一八五一、題しらず　蟬丸・今昔物語巻二十四、一七三）〔拾〕

16 さかしらにわがことい ひてあやしきさまにて（八三7・438）

さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが独りぬる（古今集巻十九、誹諧、一〇四七、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、霜月、三一〇九・同第五、ひとりね、三三五三）〔河〕

常　夏

1 にしかはよりたてまつれるあゆちかきかはらのいしぶしやうのもの（八元2・11）
①ひをのよるうぢにはあらで西河の網だに有らばいをもすくはん（実方朝臣集、三六六三、かへし）〔異〕〔岷〕
②加茂川の瀬にふす鮎のいを取りて寝てこそ明かせ夢に見えつや（大和物語、三五二）〔河〕、〔孟〕〔岷〕ねにこそゆかめ夢にみゆやと
③君ませば物も思はず玉河の瀬に伏す鮎のやなこほりして（古今六帖第三、鮎、三三八二）〔河〕かも川の瀬にふす鮎やなほこりにして（真本鮎のやなほこもして）、〔岷〕賀茂川の…やなこもりして
④あたら夜を妹とも寝なで取り難き鮎取る〳〵と岩の上にゐて（古今六帖第三、鮎、三三八三）〔河〕〔岷〕

2 せみのこゑなどもいとくるしげにきこゆれば（八元7・11）
かはむしは声もたへぬに蟬のはのいとうすき身もくるしげに鳴く（花山院集）〔河〕声もたへぬに（真本たてぬに）、〔屋〕〔岷〕〔引〕声たてねど、〔集〕

3 この春のころをひゆめがたりしたまひけるを（八三〇3・12）
はかなくも枕定めず明かすかな夢語りせし人をまつとて（小町集、一六六一・玉葉集巻十一、恋三、二五八五、題しらず　小町）〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

4 女のわれなむかこつべきことあるとなのりいで侍けるを（八三〇4・12）
知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆへ（古今六帖第五、三四三五、むらさき）〔休〕〔紹〕

5 いとおほかめるつらにはなれたらむをくるゝかりをしゐてたづね給ふ（八三〇8・13）
るゐよりも独り離れて飛ぶ雁の友に後るゝ我が身悲しな（曽丹集、三四七四）〔河〕〔紹〕我が身かなしも、〔休〕波よりも…我が身かなしも、〔孟〕〔新〕〔事〕

6 そこきよくすまぬ水にやどる月はくもりなきやうのいかでかあらむと（八三〇12・13）
①底清きにひだの池の水の面はくもりなき世の鏡とぞ見る（栄花物語、玉の村菊、三七七、慶滋為政）〔紫〕〔異〕
②白川のしらずともいはじ底清み流れてよゝにすまむと思へば（古今集巻十三、恋三、六六六、題しらず　平貞文・古今六帖第五、をしまず、三三九一〇）〔紫〕〔異〕

7 おなじかざしにてなぐさめむになでうことかあらむ（八三一1・13）
①わがやどと頼むよし野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ（後撰集巻十二、恋四、八一〇、かへし　伊勢・古今六帖第四、かざし、三三七六、伊勢、「君が行かば」・伊勢集、一八一七、返し）〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
②盗人の立田の山に入りにけり同じかざしの名にやけがれむ

〔拾遺集巻六、雑下、三六〇、廉義公の家のかみゐに旅人の盗人にあひたるかたかける所　藤原為頼〕〔拾〕〔余〕

8 やう〳〵かやうのなかにいとはれぬべきよはひにもなりにけりや（八三11・14）

いづくにか身をばよせまし世の中に老をいとはぬ人しなければ（未詳）〔拾〕〔余〕

9 おほきみだつすぢにてかたくなゝりとにやとのたまへばきまさばといふ人も侍けるをときこえ給ふいでそのみさかなもてはやされんさまはねがはしからず（八三2・15）

わいへは　とばり帳も　垂れたるを　大君来ませ　聟にせむ　御肴に　何よけん　鮑栄螺か　石陰子よけむ　鮑栄螺か　石陰子よけむ（催馬楽、我家、六〇）〔釈前〕和伊戸波止波利帳毛多礼左留乎於ゝ保支美支万世無己尓世無左可奈尓与介牟安波比左多乎加可世与介無安波比太乎可加世与介無、〔釈書〕我いゐはりてもたれたるをおき申さはむとにせんみさかなにあはひさ□をは□や、〔紫〕〔異〕〔河〕〈花〉〈弄〉〈一〉〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

10 たゞおさなきどちのむすびをきけん心もとけず（八三4・16）

磐代の野中に立てる結び松情も解けず古思ほゆ（万葉集巻二、一四四、長忌寸意吉麿・拾遺集巻十三、恋三、八五四、題しらず人麿、「むかし思へば」・同巻十九、雑恋、三三六、題しらず人麿、「むかし思へば」・柿本集、一五〇三、「昔おもへば」・古今六帖第五、昔をこふ、三三七四、「昔をぞおもふ」）〔河〕〔孟〕〔引〕昔おもへば、〔岷〕むかしおもへば〔不及引歌〕

11 よのきゝみゝかろしとおもはれはしらずがほにて（八三5・16）

言に云へば耳にたやすし少くも心のうちにわが思はなくに（万葉集巻十一、二三八二）〔拾〕

12 ぬきがはのせゞのやはらたといとなつかしくうたひたまふおやさくるつまはすこしうちわらひつゝわざともなくかきなし給ひたるすがゝきのほど（八三6・18）

貫河の瀬瀬の　やはら手枕　やはらかに　ぬる夜はなくて親離くる夫　親離くる夫は　ましてるはし　しかさらば矢矧の市に　沓買ひにかむ　沓買はば　線鞋の　細底を買へ　さし履きて　上裳とり著て　宮路きよはむ（催馬楽、貫河、五）〔釈前〕奴支可波の世ゝ乃也波良多末久良也波良加尓奴留与波名久波於也左久留川末於也左久留川末波末之天留波ゝ之加沙良波也波支乃伊知尓久川加比尓加乎久川加波ゝ千加伊乃保曽之支乎可戸左之波支乎波毛止利支天美世之知加与波乎、〔釈書〕ぬき川のせゞの玉くらやわらかにぬる夜はなくておやさくるつま、〈奥〉〈紫〉〔異〕〔河〕〈花〉〈一〉〔休〕〔紹〕〈孟〉〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〈玉〉〈余〉〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

13 ちかくゐざりよりていかなる風のふきそひてかくはひゞき侍ぞと（八三13・19）

①琴の音にみねの松風通ふらしいづれのをより調べそめけむ

〔拾遺集巻八、雑上、四二一、野宮に斎宮の庚申し侍りけるに松風入ニ夜琴一といふ題をよみ侍りける　斎宮女御・古今

六帖第五、こと、三四三・和漢朗詠集巻下、管絃、四六九）
〔余〕〔上句ノミ〕、〔集〕

②松のねは秋の調べに聞こゆなり高くせめあげて風ぞひくらし（拾遺集巻七、物名、三七、ひぐらし　貫之・躬恒集、一五五一、日ぐらし）〔余〕ととのねは（初句）

14 なでしこのとこなつかしき色をみばもとのかきねを人やたづねむ（八三六7・20）
秋も猶とこなつかしき花の色をうたがひをける露ぞはかなき（規子内親王家歌合）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

15 この事のわづらはしさにこそまゆごもりも心ぐるしう思ひきこゆれと（八三六7・20）
たらちねの親のかふこのまゆごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて（拾遺集巻十四、恋四、八九五、題しらず　人麿・古今六帖第二、親、三三七一、いへのおとくまろ・古今六帖第五、わぎもこ、三三九三・柿本集、一五三五、「君に逢はずて」・万葉集巻十二、三九九一、「母が養ふこの」）〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕はゝがかふこの、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

16 山がつのかきほにおひしなでしこのもとのねざしをたれかたづねん（八三六10・20）
あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ（古今集巻十四、恋四、六九五、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、なでしこ、三四七六・和泉式部日記、五六〇、「垣穂に生ふる」）〔事〕〔評〕

17 をのづからせきもりつよくともものゝ心しりそめ（八三六4・21）
人知れぬわが通ひ路の関もりはよひ〳〵ごとにうちもねななむ（古今集巻十三、恋三、六三三、ひんがしの五条わたりに人を知りおきてまかり通ひけり、忍びなる所なりければ門よりしもえいらで垣のくづれより通ひけるを、たび重なりければ主人聞きつけてかの道に夜毎に人をふせて守らすれば、いきけれどえあはでのみ帰りてよみてやりける　業平朝臣・伊勢物語、三・業平集、一六一三）〔河〕、〔一〕（初句ノミ）、〈孟〉〔岷〕、〔湖〕（上句ノミ）、〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

18 わが心も思ひいりなばしげくともさはらじかしとおぼしよる（八三六5・21）
筑波山は山しげ山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり（重之集、二〇〇四、百首の歌、重之帯刀にてはべりし時春宮に歌召しければ、恋十首）〔釈前〕、〔釈書〕恋の山はしげくとも思ひ入るにはさはらざりける、〔奥〕〔紫〕、〔異〕しげくとも思はるゝとは、〔弄〕（初句ノミ）、〔河〕、〔一〕〔休〕（第二句ノミ）、〔細〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

19 うたゝねはいさめきこゆるものをなどかいとものはかなきさまにてはおほとのごもりける（八四〇11・24）
垂乳根の親のいさめしうたた寝はもの思ふ時のわざにぞありける（拾遺集巻十四、恋四、八九七、題しらず　読人しらず・

古今六帖第四、うたゝね、三元三七、小町、「わざにざりける」〔釈前〕〔釈書〕、〔奥〕〔紫〕しわざなりけり、〔異〕物思ふおりの、〔河〕〔一〕、〔休〕（第二句ノミ）、〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕＜拾＞〔新〕〔全〕〔事〕

20 心やすくうちすてざまにもてなしたるしなゝき事なり（八四〇13・24）

身は捨てつ心をだにもはふらさじ終には如何なると知るべく（古今集巻十九、雑体、一〇八四、題しらず　興風・興風集、一六三三、「なると見るべく」・古今六帖第四、雑の思、三三〇〇三、興風）〔新〕

21 ねんごろからむ人のねぎ事になしばしなびき給ひそ（八四一10・25）

ねぎ言をさのみ聞きけむやしろこそ果てはなげきの森となるらめ（古今集巻十九、雑体、誹諧、一〇三三、題しらず　さぬき）〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕、〔孟〕もりとなりけめ、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔対〕〔事〕〔大〕

22 おもしろきむめの花のひらけさしたるあさぼらけおぼえてのこりおほかりげにほゝゑみ給へるぞ人にことなりけると（八四三14・26）

匂はねどほほゑむ梅の花をこそ我もをかしと折りてながむれ（曽丹集、三〇六九）〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔事〕〔集〕

23 すぐろくをぞうち給ふてをいとせちにをしもみてせうさい〳〵とこふこゑぞ（八四三4・27）

一二の目のみにあらず五六三四さへありける双六の頭（万葉集巻十六、三八三七）〔河〕さや（寛本）ありけり、〔孟〕〔岷〕

24 なかにおもひはありやすらむいとあさえたるさまども（八四四8・27）

さざれ石の中に思ひはありながらうち出づることのかたくもあるかな（未詳）〔紫〕、〔異〕なかの思ひは…うちいでむ事のさもかたきかな、〔河〕、〔弄〕（第二句ノミ）、〔一〕さもかたきかな、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕

25 みづをくみいたゞきてもつかうまつりなんといとよげにいますこしさえづればいふかひなしとおぼしていとじかおりたちてたきゞひろい給はずともまいり給ひなん（八四五12・30）

法華経を我がえしことは薪こり菜つみ水汲み仕へてぞ得し（拾遺集巻二十、哀傷、一三四六、大僧正行基よみ給ひける）〔河〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

26 あはつけきことはざまにのたまひいづることばことはゞ〳〵しくてことばだみて（八四七4・32）

あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそものは言ひけれ（拾遺集巻七、物名、四一三、したゞみ　読人しらず）〔河〕物はいふなれ（不本いひけれ、寛本いはるれ）、〔孟〕〔岷〕〔事〕〔大〕〔評〕

27 あしがきのまちかきほどにはさぶらいながら（八四七11・32）

人知れぬ思ひやなぞとあし垣のま近けれども逢ふよしのなき（古今集巻十一、恋一、五〇六、題しらず　読人しらず・古今六帖第五、近くてあはず、三六五五、「思ひやなにぞ」）〔釈前〕

〔奥〕〔紫〕〔岷〕あふよしもなし、〔釈書〕思ひはなぞと…逢ふよしもなし、〔異〕〔休〕思ひやなにと、〔河〕あふよしのなみ、〔一〕あふよしをなき、＜細＞、〔孟〕人しれず思ふやなにぞ…あふよしのなみ、〔屋〕あふよしもがな、〔湖〕〔新〕あふよしをなみ、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

28 かげふむばかりのしるしも侍らねばなこそのせきをやすへさせ給へらむとなん（〈四七12・32）

①立ち寄らば影踏むばかり近けれど誰かなこその関をすゑけむ（後撰集巻十、恋三、六三、寛平の帝御ぐしおろさせたまうての頃御帳のめぐりにのみ人はさぶらはせ給ひて近うもめしよせられざりければかきて御帳に結びつけゝる　小八条御息所・古今六帖第二、関、三一九〇、「近き間に逢ひ見ぬ関をたれかすゑけむ」〔釈前〕たまゆらは…あひみぬせきをたれかためけん、〔釈書〕たちよらで…あひみぬ関を誰かすゑけん、〔奥〕〔紫〕〔河〕〔屋〕〔岷〕あひ見ぬ関を誰かすへけん、〔異〕あひ見ぬ関を誰かさだめん、〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕、〔湖〕〔新〕なこその関を誰かすへけん、〔引〕、〔余〕ちかきまにあひみぬ関を誰かすゑけん、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②あひ見てはおもてふせにや思ふらんなこその関にをひよ帚木（未詳）〔釈前〕、〔釈書〕おもてふせとや…おふるはゝ木ゝ、〔奥〕〔岷〕思ふべし、〔紫〕〔河〕おもてふせにや思ふべし、〔異〕

29 しらねどもむさしのといへばかしこけれどもあなかしこや〈とて（〈四七13・32）

知らねどもむさしのといへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ（古今六帖第五、むらさき、三四三三）〔釈前〕かたられぬ（第三句）、〔釈書〕よしやそことは、〔奥〕（第二句ノミ）、〔紫〕よしやそこそは、〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

30 いとふにはゆるにや（〈四七14・32）

①にくさのみますだの池のねぬなはゝいとふにはゆるものにぞありける（未詳）〔釈前〕ものにこそありけれ、〔釈書〕いとふにはふる、〔奥〕〔紫〕〔異〕、〔河〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕ねぬなはの、〔一〕〔休〕〔全〕〔対〕〔大〕

②あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき（後撰集巻十、恋三、六〇六、文遣はせども返事もせざりける女のもとに遣はしける　読人しらず・拾遺集巻十五、恋五、九六六、題しらず　読人しらず、「思ひ絶ゆべき」）〔異〕思ひたゆべき、〔屋〕〔拾〕〔新〕〔事〕〔評〕〔集〕

31 いでや〈あやしきはみなせがはにをとて（〈四八1・33）

①あしき手をなほよきさまにみなせ川底のみくづの数ならずとも（未詳）〔釈前〕、〔釈書〕わろきてを…そこのもくづの、〔奥〕、〔紫〕なをよきまでに、〔異〕、〔河〕数ならぬ（不本真本）とも、〔一〕猶よきかたに、〔休〕、〔紹〕かずならねども、〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

②ことに出でゝいはぬばかりぞ水無瀬川下に通ひて、恋しきも

のを（古今集巻十二、恋二、六〇七、題しらず　友則・古今六帖第五、いはで思ふ、三三九七、友則、「声にいでゝ…恋しき物」）〔余〕〔事〕〔評〕〔集〕

③水無瀬川ありて行く水なくはこそ終に我が身を絶えぬと思はめ（古今集巻十五、恋五、七五三、題しらず　読人しらず）〔新〕〔余〕

32 くさわかみひたちのうらのいかゞさきいかであひみんたごのうらなみ（八四八2・33）

①駿河なるたごの浦浪たゝぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし（古今集巻十一、恋一、四八九、題しらず　読人しらず）〔休〕〔紹〕〔岷〕〔新〕〔大〕

②常陸なるいかこの崎の忘れ貝拾ふかひなき物にもあるかな（元真集、二〇四〇五）〔拾〕〔新〕、〔玉〕（第二句ノミ、「いかゞの崎の」）、〔余〕

③うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばむ事をしぞ思ふ（伊勢物語、一〇六・古今六帖第六、春の草、三四二四・新千載集巻十一、恋一、一〇一六、妹のをかしきを見てよめる　在原業平朝臣）〔新〕

33 おほかはみづのとあをきしきしひとがさねに（八四八2・33）

①み吉野の大川のべの藤浪のなみに思はばわが恋ひめやは（古今集巻十四、恋四、六九九、題しらず　読人しらず）〔釈前〕〔釈書〕おほかは水の…我恋ひめやは、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕なみに思ひて、〔休〕〔紹〕、〔屋〕おそ川水の、〔岷〕我こひめやは、〔湖〕なみに思ひて我こひめやも、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②わたらひの大川の辺の若久木我久ならば妹恋ひむかも（万葉集巻十二、三一三七）〈花〉

③み吉野の大河水のゆほびかにあらぬもの故波のたつらむ（古今六帖第五、川、三三八七）〔拾〕〔新〕〔余〕、〈玉〉（拾遺に引る歌はかなはず）

34 べにといふものいとあからかにかいつけてかみけづりつくろひ給（八四九8・35）

いたゐけやべにゝも似たる梅の花あこが顔にもつけたくぞある（未詳）〔孟〕〔岷〕

篝火

1 はつかぜすゞしくふきいでゝせこが衣もうらさびしき心ちしたまふに（八五11・40）

①はつ風のすゞしくもあるか我が背子が衣のうらのうらもさびしき（未詳）〔釈前〕、〔紫〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔新〕涼しく吹けば…衣のすそのうらぞさびしき、〔異〕うらぞさびしき、〔湖〕〔拾〕秋風の涼しく吹けば…衣のすそのうらぞさびしき、〔余〕（初句ノミ）、〔全〕〔対〕〔評〕〔集〕、＜細＞（引歌かなはず）

②わがせこが衣の裾を吹き返しうらめづらしき秋のはつ風（古今集巻四、秋上、一七一、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、初秋、三一〇〇、躬恒・同第五、秋の衣、三四三・家持集、一六〇三）〔釈書〕うらさびしかる秋はきにけり、〔一〕（上句ノミ）、〔細〕〔岷〕〔湖〕〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

2 いつまでとかやふすぶるならでもくるしきしたもえなりけりと（八五六12・41）

夏なれば宿にふすぶるかやり火のいつまで我が身下もえにせむ（古今集巻十一、恋一、五〇〇、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、火、三六九、「夏くれば」）〔釈前〕〔釈書〕〔紫〕〔河〕夏くれば、〔異〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

3 かぜのをと秋になりけりときこえつるふえのねにしのばれてなむ（八五6・41）

①秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる（古今集巻四、秋上、一六九、秋立つ日よめる　藤原敏行朝臣・古今六帖第一、秋立つ日、三一〇〇三、藤原敏行朝臣・敏行集、秋立つ日、一六五三・和漢朗詠集巻上、秋、立秋、三〇、敏行）〔紫〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②風の音の秋にもあるかな久方の天つ空こそ変るべらなれ（古今六帖第一、秋の風、三三九一・貫之集、一七三五、「風の音は秋にもあるか」）〔河〕〔屋〕〔岷〕風の音秋にもなるか…あまつ空さへかはるべらなる

4 ゑひなきのついでにしのばぬこともこそとのたまへば（八五13・42）

夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるにあにしかめやも（万葉集巻三、三四六、大宰帥大伴卿）〔花〕〔休〕〔孟〕〔岷〕ゑいなきするに、〔屋〕ゑいなきするも

野分

1 花のえださしすがたあさゆふ露のひかりもよのつねならず玉かとかゞやきてつくりわたせるのべの色をみるに（六三2・45）

植ゑ立てゝ君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらむ（後撰集巻六、秋中、三六〇、御かへし　伊勢・拾遺集巻三、秋、一六七、亭子院のおまへに前栽うゑさせ給ひてこれよめと仰せごとありければ　伊勢・古今六帖第一、露、三四四〇、伊勢、「野べなれば玉とも見よと露やおくらむ」・伊勢集、一六三、亭子の帝の御前に前栽植ゑ給ひて朝露おけるをめでさせ給ひて歌よめとのたまひければ）〔河〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

2 すゞしうおもしろく心もあくがるゝやうなり（六三4・45）

秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に（万葉集巻十、二一〇三）〔拾〕〔余〕

3 春秋のあらそひにむかしより秋に心よする人はかずまさりけるを（六三5・45）

①春はたゞ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる（拾遺集巻六、雑下、五二、題しらず　読人しらず）〔河〕〔花〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔対〕

②冬ごもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　黄葉（もみぢ）をば　取りてそしのふ　青きをば　置きてそ歎く　そこし恨めし　秋山われは（万葉集巻一、一六、額田王）〔河〕そこしうらみし秋山ぞわれは（一部ノミ）、＜花＞、〔紹〕冬ごもり春されくればなかざりし鳥もき鳴きぬさかざりし花もさければ（一部ノミ）、〔岷〕〔湖〕＜新＞〔全〕〔対〕

③おもしろのめでたき事をくらぶるに春と秋とはいづれまされる（未詳）〔河〕〔岷〕

④春はたゞ花こそはたれ野べごとに錦をはれる秋はまされり（未詳）〔河〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔余〕

⑤春秋に思ひ乱れてわきかねつ時につけつゝうつる心は（拾遺集巻六、雑下、五〇九、ある所に春秋いづれかまさるととはせ給ひけるによみて奉りける　貫之・貫之集、一〇三七、ある所に春と秋といづれか優れると問はせ給ひけるに詠みて奉りける）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔余〕

⑥大かたの秋に心はよせしかど花みる時はいづれともなし（拾遺集巻六、雑下、五一〇、元良のみこ承香殿のとし子に春秋いづれかまさるととひ侍りければ秋もをかしう侍りといひければおもしろきさくらをこれはいかゞといひて侍りければ）〔花〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔余〕

⑦花もみつ紅葉をもみつむしの音もこゑ〳〵おほく秋はまされる（未詳）〔花〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕

4 なだゝる春のおまへのはなぞのに心よせし人々（六三6・45）

①数しらず君が齢をのばへつゝなだゝる宿の露とならなむ

（後撰集巻七、秋下、三九四、隣に住み侍りける時九月八日伊勢が家の菊に綿をきせに遣したりければ又のあしたに折てかへすとて　伊勢・伊勢集、一八六七・古今六帖第一、九日、三〇六七、「限りなく…のばへつる」）〔拾〕〔余〕

②露だにもなだゝる宿の菊ならば花の主やいくよなるらむ（後撰集巻七、秋下、三九三、かへし　藤原雅正・伊勢集、一八四八）〔河〕菊なれば、〔岷〕名だゝる園の菊なれば…いく世かさねん

③大かたの秋に心はよせしかど花みる時はいづれともなし（拾遺集巻六、雑下、三二〇、元良のみこ承香殿のとし子に春秋いづれかまさるととひ侍りければ秋もをかしう侍りといひければおもしろきさくらをこれはいかゞといひて侍りければ）〔岷〕

5 又ひきかへしうつろふけしき世のありさまにたり（八六三6・45）

①色みえで移ろふものは世のなかの人の心のはなにぞありける（古今集巻十五、恋三、七七七、題しらず　小町・古今六帖第五、いろ、三四三三・小町集、一九三八、人の心かはりたるに）〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔事〕〔評〕

②春秋に思ひ乱れてわきかねつ時につけつゝうつる心は（拾遺集巻六、雑下、三二九、ある所に春秋いづれかまさるととはせ給ひけるによみて奉りける　貫之・貫之集、一〇三七、ある所に春と秋といづれか優れると問はせ給ひけるに詠みて奉りける）〔河〕〔岷〕、〔新〕（下句ノミ）

6 草むらの露の玉のをみだるゝまゝに御心まどひもしぬべく（八六三11・45）

①ちはやぶる　かみな月とや　けさよりは　曇りもあへず
うちしぐれ　もみぢとともの　ふるさとの　よし野の山の
山あらしも　寒く日ごとに　なりゆけば　玉の緒とけて
こきちらし　あられ乱れて　しもこほり　いや固まれる
庭のおもに　むら〳〵みゆる　ふゆぐさの　上にふりしく
しらゆきの　つもり積りて　あらたまの　年をあまたも
すぐしつるかな（古今集巻十六、雑体、一〇〇五、冬のなかうた　凡河内躬恒）〔花〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕玉のをとけてこきちらし
あられみだれて霜こほり（一部ノミ）、〔休〕〔紹〕玉のをとけてこきちらし（一部ノミ）

②しら露に風のふきしく秋の野は貫ぬきとめぬ玉ぞちりける（後撰集巻六、秋中、三〇八、延喜の御時歌めしければ　文屋朝康・寛平御時后宮歌合、三五四六）〔岷〕〔拾〕〔新〕〔余〕〔事〕〔評〕

7 おほふばかりのそでは秋の空にしもこそほしげなりけれ（八六三12・46）

大空におほふばかりの袖もがな春さくはなを風にまかせじ（後撰集巻三、春中、六四、題しらず　読人しらず・寛平御時后宮歌合、三五六〇、「大空を」）〔釈前〕ちらさでもみん（第五句）、〔釈書〕ちりかふ花を（第四句）、〔奥〕〔紫〕、〔異〕風にしらせじ、〔河〕〔細〕〔孟〕風にちらさじ、〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

8 うしろめたくいみじとはなのうへをおぼしなげく（八三14・46）

①咲けばちる咲かねば恋し山桜おもひたえせぬ花の上かな

（拾遺集巻一、春、三六、子にまかりおくれて侍りける頃東山にこもりて　中務）〔河〕〔岷〕

②朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風の後めたさに

（拾遺集巻一、春、三九、題しらず　兵部卿元良親王）〔岷〕〔湖〕〔新〕

9 もとあらのこはぎはしたなくまちえたる風のけしきなり露もとまるまじくふきちらすを（八六四2・46）

宮城野のもとあらのこ萩露を重み風を待つごと君をこそまて（古今集巻十四、恋四、六九四、題しらず　読人しらず・古今六帖第五、人をまつ、三三六六四・同第六、秋萩、三四九六）〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕、〔細〕（下句ノミ）、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

10 さとにほふ心ちして春のあけぼのゝかすみのまよりおもしろきかばざくらのさきみだれたるをみる心ちす（八六四8・46）

①浅緑野べのかすみはつゝめどもこぼれて匂ふはなざくらかな（拾遺集巻一、春、四〇、菅家万葉集の中　読人しらず・古今六帖第五、みどり、三四三六〇・寛平御時后宮歌合、三三三四七）〔河〕春の霞（不本真本けしきは…かば桜かな、〔孟〕〔岷〕春のけしきは（第二句）、〔湖〕かば桜かな、〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕

②やま桜霞のまよりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ（古今集巻十一、恋一、四七九、人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後によみてつかはしける　貫之）〔引〕

11 わがかほにもうつりくるやうにあい行はにほひちりて（八六四9・46）

①雨ふれば笠取山のもみぢ葉は行きかふ人の袖さへぞてる

（古今集巻五、秋下、三六三、是貞のみこの家の歌合によめる　忠岑）〔拾〕

②わが背子がしろたへ衣行き触ればにほひぬべくももみづ山かも（万葉集巻十、二九三）〔拾〕

12 いかにぞよべ宮はまちよろこび給きや（八六九7・52）

こほろぎの待ち歓ぶる秋の夜を寝るしるしなし枕とわれは

（万葉集巻十、三三六四）〔異〕きりぐす待ちよろこべる…ぬるしるしなき枕ともがな

13 さやかならぬあけぼのゝほど（八七〇8・53）　※あけぼの―あけぐれ青横池高三河

朝ぼらけ蜩のこゑ聞こゆなりこや明けぐれと人のいふらむ

（拾遺集巻八、雑上、四六七、山寺にまかりける暁に日ぐらしの鳴き侍りければ　左大将済時）〔河〕朝開き、〔岷〕日ぐらしの声ぞ

14 あらきかぜをもふせがせ給ふべくやと（八七一8・54）

①この折れる桜の散らで残れるは荒き風にもあてずやありけむ（忠見集、二〇六六、桜散りてなき折に折りたるを人のもたれば）〔余〕

②あはれわれ　いつゝの宮の　みやびとゝ　その数ならぬ
身をなして　思ひしことは　かけまくも　かしこけれ共
たのもしき　かげに二たび　おくれたる　ふたばの草を
ふくかぜの　荒きかたには　あてじとて　せばき袂を　ふ
せぎつゝ　ちりも据じと　みがきては　玉のひかりを　誰
れかみむ　とおもふ心に　おほけなく　かみつ枝をば　さ
しこえて　はな咲く春の　みやびとゝ　なりし時はゝ　い
かばかり　しげき影とか　たのまれし　末の世までと　お
もひつゝ　こゝの重ねの　そのなかに　いつきすべしも
ことてしも　誰ならなくに　をやまだを　人にまかせて
われはたゞ　袂そほづに　身をなして　ふたはる三春　す
ぐしつゝ　その秋ふゆの　あさぎりの　絶間にだにも　と
思ひしを　みねのしら雲　よこさまに　立ち変りぬと　み
てしかば　身を限とは　おもひにき　命あらばと　たのみ
しは　人におくるゝ　なりけり　思ふもしるし　やまが
はの　みなしもなりし　もろびとも　動かぬきしに　守り
あげて　沈むみくづの　はて〳〵は　かき流されし　かみ
なづき　薄きこほりに　とぢられて　とまれる方も　なき
わぶる　なみだ沈みて　かぞふれば　ふゆも三月に　なり
にけり　長きよな〳〵　しきたへの　ふさず休まず　明け
くらし　思へどもなほ　かなしきは　やそうぢ人も　あた
らよの　例なりとぞ　さわぐなる　況てかすがの　すぎむ
らに　未だかれたる　枝はあらじ　おほ原のべの　つぼす
みれ　つみ犯しある　ものならば　照日もみよと　いふこ
とを　年のをはりに　きよめずは　わが身ぞ遂に　くちぬ
べき　谷のうもれ木　はるくとも　偖ややみなむ　年のう
ちに　春ふくかぜも　心あらば　袖のこほりを　とけとふ
かなむ（拾遺集巻九、雑下、長歌、五四、円融院の御時大将
はなれ侍りて後久しく参らで奏せさせ侍りける　東三条太
政大臣）（余）たのもしきかげにふたゝびおくれたるふた
ばの草をふく風のあらきかたにはあてじとてせばきたも
とをふせぎつゝ（一部ノミ）

15 心のやみにやとてわが御かほはふりがたく（八三2・55）
人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
（後撰集巻十三、雑一、一〇三、太政大臣の左大将にてすまひの
かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
れかれ罷りあかれけるにやんごとなき二三人ばかりとゞめ
てまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうへ
など申しけるついでに　兼輔朝臣・古今六帖第二、親、三三
三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一六六、子
の悲しきことを集りて云ひければ、中納言）（釈前）（異）
（紹）まよひぬるかな、（奥）（湖）（新）（第二句ノミ）、（紫）、
（河）（上句ノミ）、（休）、（孟）（初句ノミ）、（屋）（岷）（引）（全）
（対）（事）（大）（評）（集）

16 こよひの風にもあくがれなまほしく侍つれとむづかり給へば
（八三13・57）
風の上にありかさだめぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべ
らなり（古今集巻十六、雑下、九六、題しらず　読人しらず・

古今六帖第一、塵、三六三〕〔新〕〔事〕

17 風につきてあくがれたまはむやかるゝしからむ（八三14・57）

風の上にありか定めぬ塵の身は行くえも知らずなりぬべらなり（古今集巻十六、雑下、九九六、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、塵、三六三〕〔拾〕〔余〕

18 なよたけをみ給へかしなどひがみゝにやありけむ（八七1・59）

なよ竹のよながきうへに初霜のおきゐて物を思ふ頃かな（古今集巻十八、雑下、九九三、寛平の御時にもろこしのはう官にめされて侍りける時に東宮のさぶらひにてをのこども酒たうべける序でによみ侍りける　藤原のたゞふさ）〔紫〕〔異〕、〔岷〕（私此引歌に及ばず）

19 ほそびつめくものにわたひきかけてまさぐるわか人どもあり（八七4・59）

不知火の筑紫の綿は身に付てまだき着ねども暖にみゆ（古今六帖第五、わた、三四三八、沙弥満誓・万葉集巻三、三三六）

〔河〕又はみねども、〔孟〕〔岷〕きてはみねども

20 御なをし花文れうをこのごろつみいだしたるはなしてはかなくそめいで給へる（八七9・60）

月草に衣はすらむあさ露にぬれての後はうつろひぬとも（古今集巻四、秋上、二四七、題しらず　読人しらず・柿本集、一三〇九、「朝霧に」・古今六帖第三、つきくさ、三四八三）〔孟〕

21 風さはぎむら雲まがふ夕にもわするゝまなくわすられぬ君（八七12・61）

小竹（ささ）の葉はみ山もさやに乱るともわれは妹思ふ別れ来ぬれば（万葉集巻二、一三三、長皇子・柿本集、一三一〇九、石見の国にめをおきてのぼりてよめる、「み山もよそに乱るらむ…置きて来ればし」・古今六帖第四、別、三三三三、「み山もよそに別るらむ我は妹にし」）〔拾〕〔余〕

22 ふきみだれたるかるかやにつけたまへれば（九七12・61）

まめなれどよき名も立たずかるかやのいざ乱れなむしどろもどろに（古今六帖第六、かるかや、三四六九）〔集〕

行幸

1 このをとなしのたきこそうたていとおしく（八五1・67）
①とにかくに人めつゝみをせきかねて下に流るゝ音なしの滝
〔末詳〕〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〈弄〉〔一〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕〔全〕〔大〕〔評〕〔集〕
②恋わびぬねをだになかむ声たてゝいづこなるらむ音なしの滝（拾遺集巻十二、恋二、七四九、題しらず　読人しらず・古今六帖第二、里、三二五、「いづれなるらむ音なしの里」）〔余〕〔事〕
③いかにしていかによからんをの山の上より落つる音なしの滝（古今六帖拾遺、三五三六）〔河〕〈弄〉〔一〕〔細〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔集〕
④音なしの河とぞ遂に流れ出づるいはでもの思ふ人の涙は（拾遺集巻十二、恋三、七五〇、忍びてけさうし侍りける女のもとに遣はしける　元輔）〔余〕
2 さて思ひくまなくけざやかなる御もてなしなどのあらむにつけては（八五5・67）
いづ方に立ち隠れつゝ見よとてか思ひくまなく人のなり行く（後撰集巻十一、恋三、七九九、あひしりて侍りける女の心ならぬやうに見え侍りければつかはしける　藤原後蔭朝臣）〔大〕
3 そのしはすに大原野の行幸とてよにのこる人なくみさはぐを（八五6・67）
さがの山みゆき絶にし芹川の千世のふる道跡はありけり（後撰集巻十五、雑一、一〇七六、仁和の帝嵯峨の御時の例にて芹川に行幸し給ひける日　在原行平朝臣）〔孟〕
4 めづらしきかりの御よそひどもをまうけ給（八五14・68）
翁さび人なとがめそ狩衣今日ばかりとぞたづもなくなる（後撰集巻十五、雑一、一〇七七、同じ日鷹飼にてかりぎぬの袂に鶴のかたをぬひてかきつけたりける　在原行平朝臣・伊勢物語、三〇、「けふばかりこそ」）〔河〕〔孟〕〔岷〕〔引〕
5 よにめなれぬすり衣をみだれきつゝけしきことなり（八六1・68）
春日野の若紫のすりごろもしのぶのみだれ限り知られず（伊勢物語、一六・古今六帖第五、すり衣、三四三五・業平集、一六四八・新古今集巻十一、恋一、九四四、女に遣しける　在原業平朝臣）〔河〕、〔岷〕（第二句ノミ）、〔湖〕
6 くら人の左衛門のぜうを御つかひにてきじひとえだたてまつらせたまふ（八七13・69）
①かゝるせもありける物をとまりゐて身をうぢ河と思ひけるかな（末詳）〔河〕
②限りなき君がためにと折る花は時しもわかぬ物にぞありける（古今集巻十七、雑上、八六六、題しらず　読人しらず・古今六帖第五、かたみ、三九八四、「君が形見と」）〔孟〕〔岷〕我がたのむ（初句）
7 小塩山みゆきつもれる松原にけふばかりなるあとやなからむ

（八八5・70）

①翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞたづもなくなる（後撰集巻十五、雑一、一〇七七、同じ日鷹飼にてかりぎぬの袂に鶴のかたをぬひてかきつけたりける　在原行平朝臣・伊勢物語、二一〇）〔異〕〔河〕

②大原やをしほの山のこまつ原はや木高かれ千代の影みむ（後撰集巻三十、賀、一三四四、左大臣の家のをのこゞ女子かうぶりし裳着侍りけるに　貫之・貫之集、一五九三、承平五年十二月左衛門の督の殿実頼の男女君たち元服し裳着給ふ夜よめる・古今六帖第二、山、三七一七・同第六、松、三四九五〇）

〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔余〕〔大〕

8 うちきえしあさくもりせしみ雪にはさやかに空の光やはみし（八八11・70）※うちきえし―うちきらし青御横肖三河別麦打散らし雪は降りつゝしかすがにわが家の園に鶯ぞなく（拾遺集巻一、春、二、鶯をよみ侍りける　大伴家持）〔紫〕〔河〕〔花〕うちきらし、〔異〕うちきえし、〔休〕〔紹〕〔孟〕うちきらし…うぐひすのなく、〔岷〕、〔余〕うちきらし…鶯ぞなく

9 あかねさす光は空にくもらぬをなどてみ雪にめをきらしけむ（八九5・71）

天の原あかねさし出る光にはいづれの沼かさえ残るべき（新古今集巻六、雑下、一六八八、菅贈太政大臣）〔河〕〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕

10 をのづからよだけくいかめしくなるを（八九8・72）

大の浦のその長浜に寄する波ゆたけく君を思ふこの頃（万葉集巻八、一六一五）〔拾〕〔余〕

11 わざとがましきのちの名までうたゝあるべし（八九14・72）花と見て折らむとすれば女郎花うたゝある様の名にこそ有りけれ（古今集巻十九、雑体、誹諧、一〇一九、題しらず　読人しらず・遍昭集、一八八九）〔河〕〔孟〕〔岷〕

12 いでたちいそぎをなむおもひもよをされはべるに（八九11・74）

出でゝ去なば誰か別れの難からむ有しにまさる今日は悲しも（伊勢物語、九二・業平集、一六五五・古今六帖第四、別、三三四四・続後撰集巻十三、恋三、八三六、心にもあらで別れける人に遣しける　業平朝臣、「厭ひても」初句）〔休〕〔孟〕〔岷〕

13 たちそめにし名のとりかへさるゝ物にもあらず（八九18・75）むら鳥の立ちにし我が名今さらにことなしぶともしるしあらめや（古今集巻十三、恋三、六四四、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、とり、三五一三）〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

14 ありしにまさる御ありさまいきをひをみたてまつりたまふに（九002・83）

出でゝ去なば誰か別れの難からむ有しにまさる今日は悲しも（伊勢物語、九二・業平集、一六五五・古今六帖第四、別、三三四四・続後撰集巻十三、恋三、八三六、心にもあらで別れける人に遣しける　業平朝臣）〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕（不及此歌）

15 ふた方にいひもてゆけば玉くしげわが身はなれぬかけごなりけり（九〇一9・85）
君をのみ思ひかけごの玉櫛笥明け立つごとに恋ひぬ日はなし（拾遺集巻十一、恋一、六九七、題しらず　読人しらず）〔河〕

16 我身こそ恨られけれから衣君がたもとになれずとおもへば（九〇四7・87）
なか〳〵に思ひかけては唐衣身になれぬをぞうらむべらなる（後撰集巻十三、恋四、八四六、女につかはしける　読人しらず）〔余〕

17 唐衣又から衣からころもかへす〳〵もから衣なる（九〇四13・88）
①いくたびか夜にかへすらん唐衣返す〴〵もうらみらるゝは（うつほ物語、祭の使）〔河〕、〔孟〕〔岷〕うらみらるれば
②唐衣ひもゆふぐれになるときはかへす〴〵ぞ人は恋しき（古今集巻十一、恋一、五三五、題しらず　読人しらず）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔事〕〔評〕〔集〕

18 うらめしや興津玉もをかづくまで磯がくれけるあまの心よ（九〇六2・89）
何せむにへだのみるめを思ひけむ沖つ玉もを潜く身にして（後撰集巻十五、雑一、一一〇〇、志賀の唐崎にてはらへしける人のしもづかへにみるといふ侍りけり、大伴黒主そこにまできてかのみるに心をつけていひ戯ぶれけり、はらへはてゝ車より黒主に物かづけゝる其裳のこしにかきつけてみるに送り侍りける　黒主・古今六帖第五、裳、三四八四）〔花〕つたのみるめを、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔大〕

19 よるべなみかゝるなぎさにうちよせてあまもたづねぬもくづとぞみし（九〇六5・90）
逢ふまでの形見とてこそ留めけむ涙に浮かぶ藻屑なりけり（古今集巻十四、恋四、七四五、親の守りける人のむすめにいと忍びにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひければ急ぎかへるとて裳をなむぬぎ置きて入りにける、其後裳を返すとてよめる　興風・興風集、一六六九〇・古今六帖第五、かたみ、三三九三）〔拾〕（下句ノミ）、〔余〕

20 さかしらにむかへたまひてかろめあざけり給ふ（九〇八13・93）
①さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが独りぬる（古今集巻十九、雑体、誹諧、一〇四七、題しらず　読人しらず・古今六帖第一、霜月、三一〇九一・同第五、ひとりね、三三五三）〔紫〕さやぐしもよは、〔異〕〔河〕
②秋のゝに行きてみるべき花の色を誰さかしらに折りてきつらん（古今六帖拾遺、三三三六）〔河〕

21 ざうやくをもたちはしりやすくまどひありきつゝ心ざしをつくして（九〇九9・94）
難波津に御船泊てぬと聞こえ来ば紐解き放けて立ち走りせむ（万葉集巻五、八九六）〔拾〕

22 そのうちになさけすてずおはしませばなどいとようすかしたまふ（九一〇11・95）
忘れてもあるべきものをこの頃の月夜にいたく人なすかせそ（清慎公集、三三九六、七月ばかりに月あかき夜例の物云ふ人のもとに・藤原義孝集、二四四五、七月ばかりに月のあ

かきに物言ふ人のもとに、「月夜よいたく」・後拾遺集巻三十、
誹諧、一三四、七月ばかり月のあかゝりける夜女の許につか
はしける　少将藤原義孝）〔拾〕〔余〕月夜よいたく

藤袴

1 人わらへなるさまにみきゝなさむとうけひ給人々も（九一七6・99）

水の上に数書く如きわが命を妹に逢はむとうけひつるかも
（万葉集巻十一、二四三）〔河〕〔毛〕数かくごとく我が命、〔岷〕
わが命

2 かの野わきのあしたの御あさがほは心にかゝりて（九一八14・101）

①暮に逢ひて朝面無み隠にか日長く妹が廬せりけむ（万葉集巻一、六〇、長皇子）〔河〕朝顔なしみかくれぬかけながきいもが

②暮に逢ひて朝面無み隠野の萩は散りにき黄葉早続げ（万葉集巻八、一五六、縁達師）〔河〕槿はつるかくれのゝ萩はちりゆき

3 忍びがたく思たまへらるゝかたみなればぬぎすて侍らむこともいと物うく（九二〇1・102）

①藤衣はらへてすつるなみだ川きしにもまさる水ぞ流るゝ
（拾遺集巻三十、哀傷、一三九一、服ぬぎ侍るとて　読人しらず）
〔拾〕〔余〕

②限りあればけふぬぎ捨てつ藤衣はてなきものは涙なりけり
（拾遺集巻三十、哀傷、一三九三、恒徳公の服ぬぎ侍るとて　藤原道信朝臣・小大君集、一六八三）〔拾〕

③をしきかなかたみにきたるふぢ衣ただこの比にくち果てぬべし（和泉式部続集、九五八、そでのいたうぬれたるをみて・千載集巻六、哀傷、五四七、弾正尹為尊のみこにおくれ侍りてよめる　和泉式部）〔拾〕〔余〕

4 うつたへに思よらでとり給（九二〇9・103）

①春雨は降り初めしかどうつたへに山を緑になさむとやみし（忠見集、三〇六八、雨）〔花〕〔休〕〔孟〕、〔岷〕ふりそめしより、〔湖〕

②神樹にも手は触るとふをうつたへに人妻と言へば触れぬものかも（万葉集巻四、三一七、大伴卿）〔拾〕さか木にも

③うつたへに籬の姿見まく欲り行かむと言へや君を見にこそ（万葉集巻四、七八、大伴宿禰家持）〔拾〕

④うつたへに鳥は喫まねど縄延へて守らまく欲しき梅の花かも（万葉集巻十、一八五八）〔拾〕

⑤緑子の　若子が身には　たらちし　母に懐かえ　襁褓の平生が身には　木綿肩衣　純裏に縫ひ着　頸着の　童児が身には　夾はたの　袖着衣　着しわれを　にほひよる　子らが同年輩には　蟮の腸　か黒し髪を　ま櫛もち　ここにかき垂り　取り束ね　挙げても纏きみ　解き乱り　童児に成しみ　さ丹つかふ　色懐しき　紫の　大綾の衣　住吉の遠里小野の　ま榛もち　にほしし衣に　高麗錦　紐に縫ひ着け　指さふ重なふ　並み重ね着　打麻やし　麻績の児らあり衣の　宝の子らが　打栲は　経て織る布　日曝の　麻紡を　信巾裳なす　愛しきに取りしき　屋に経る　稲置丁女が　妻問ふと　われに遣せし　をちかたの　二綾下沓飛ぶ鳥の　飛鳥壮士が　長雨禁み　縫ひし黒沓　さし穿きて　庭に彷徨め　退り勿立ちと　障ふる少女が　髣髴聞きて　われに遣せし　水縹の　絹の帯を　引帯なす　韓帯に取らし　海神の　殿の蓋に　飛び翔る　すがるの如き　腰細に　取り飾らひ　真澄鏡　取り並め懸けて　己が顔　還らひ見つつ　春さりて　野辺を廻れば　おもしろみ　われを思へか　さ野つ鳥　来鳴き翔らふ　秋さりて　山辺を行けば　懐しと　われを思へか　天雲も　行き棚引ける　還り立ち　路を来れば　うち日さす　宮女　さす竹の　舎人壮士も　忍ぶらひ　かへらひ見つつ　誰が子そとや　思はえてある　かくの如　せられし故に　古　ささきしわれや愛しきやし　今日やも子等に　不知にとや　思はえてあるかくの如　せられし故に　古の　賢しき人も　後の世の鑑にせむと　老人を　送りし車　持ち還り来し　持ち還り来し（万葉集巻十六、三七九一）〔拾〕ありきぬのたからのこらか打たへにへておる布を日にさらし（一部ノミ）

5 おなじのゝ露にやつるゝふぢばかまあはれはかけよかごとばかりも（九二〇10・103）

おなじ野の露はいづれもとまらねどまづ消ゆとのみきくがくるしさ（うつほ物語、あて宮）〔拾〕〔余〕

6 みちのはてなるとかやいと心づきなくうたてなりぬれど（九二〇10・103）

あづま路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりも逢ひ見て

しがな（古今六帖第三、おび、三四〇六・新古今集巻十二、恋二、一〇三三）〔釈前〕〔釈書〕、〔奥〕〔紫〕〔河〕〔紹〕〔湖〕〔引〕あはんとぞ思ふ、〔一〕（第三四五句ノミ、「あはんとぞ思ふ」）、〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

7 たづぬるにはるけき野べの露ならばうすむらさきやかどとならまし（九二〇13・103）

①武蔵野は袖ひづばかり分けしかどわか紫は尋ねわびにき（後撰集巻十六、雑二、二七六、題しらず　読人しらず）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔集〕

②武蔵野のむかひの岡の草なればねを尋ねても哀とぞ思ふ（小町集、一九六三・新勅撰集巻十六、雑四、一三〇二、題しらず　小町）〔新〕

8 今はたおなじと思給へわびてなむ（九二13・103）

わびぬれば今はたおなじ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ（後撰集巻十三、恋三、九六一、事いで来て後に京極の御息所につかはしける　元良親王・拾遺集巻十二、恋二、七六六、題しらず　もとよしのみこ・古今六帖第三、みをつくし、三六二三、もとよしのみこ・元良親王集、三三四、ことといできて後京極の御息所に）〔釈前〕、〔奥〕（第一二句ノミ、「こひわびぬ」初句）、〔紫〕、〔異〕あはれとぞ思ふ、〔河〕、〔一〕（第一二句ノミ、）〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

9 今をのづからいづ方につけてもあらはなる事ありなむ思ひぐまなしやとわらひ給（九二四5・107）

いづ方に立ち隠れつゝ見よとてか思ひくまなく人のなりゆく（後撰集巻十一、恋三、七九九、あひしりて侍りける女の心ならぬやうに見え侍りければつかはしける　藤原後蔭朝臣）〔花〕おもふくまなく、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔事〕

10 よしのゝたきをせかむよりもかたきことなればいとわりなしと（九二四13・108）

①手をさへて吉野の滝はせきつとも人の心をいかゞ頼まむ（古今六帖第四、女をはなれて詠める、三三〇八三）〔紫〕〔一〕〔細〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕人の心はいかゞとぞ思ふ、〔異〕吉野の滝を、〔河〕てをおりて吉野の滝を、＜弄＞、〔紹〕せきぬとも、〔引〕あらんとぞ思ふ、〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②滝つせにうき草の根はとめつとも人の心をいかゞ頼まむ（古今六帖第四、女をはなれて詠める　紀友則）〔拾〕

11 月のあかき夜かつらのかげにかくれてものし給へり（九二七7・108）

夏なれど夏ともしらですぐるかな月のかつらのかげにかくれて（未詳）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引〕

12 いもせ山ふかきみちをばたづねずてをだえのはしにふみまよひける（九二七2・110）

①君とわれ妹せの山も秋くれば色変りぬる物にぞありける（後撰集巻七、秋下、三八〇、はらからどちいかなる事か侍りけむ　読人しらず）〔河〕〔岷〕

②睦まじき妹背の山の中にさへ隔つる雲のはれずもあるかな

（後撰集巻七、雑三、一三五、はらからの中にいかなる事かありけむ常ならぬさまに見えければ　読人しらず）〔河〕〔紹〕〔岷〕中にだに、〔大〕

③背の山に直に向かへる妹の山事許せやも打橋渡す（万葉集巻七、一二九三・古今六帖第七、橋、三四七四）〔河〕いもせ山（真本いもの山）ことゆるすかも、〔孟〕ことゆるすともうきはしわたす、〔岷〕いもせやまことゆるすても、〔拾〕ことゆるすやも

④大穴道少御神（おほなむちすくなみかみ）の作らしし妹背の山を見らくしよしも（万葉集巻七、一二四七）〔河〕おほなんち（真本なむち）…つくりたるいもせの山も（真本山は）みればよしゝも、〔休〕おほなんち…つくれりしいもせの山もみればよししも、〔孟〕おほなんち…つくりたるいもせの山はみればよしゝも、〔岷〕おほなんちすくなひこなのつくりたるいもせの山はみればかなしも、〔引〕つくれりし…みるぞうれしき

⑤陸奥のをだえの橋や是ならむふみゝふまずみ心まどはす（後拾遺集巻十三、恋三、七三一、又おなじ所にむすびつけさせ侍りける　左京大夫道雅）〔河〕〔弄〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔余〕〔大〕

⑥春日野の若紫のすりごろもしのぶのみだれ限り知られず（伊勢物語、一六・古今六帖第五、すり衣、三四三五・新古今集巻十一、恋一、九四四、女に遣しける　在原業平朝臣・業平集、一六四八）〔河〕〔岷〕

⑦陸奥のしのぶもぢずり誰故に乱れむと思ふ我ならなくに（古今集巻十四、恋四、七三六、題しらず　河原左大臣・伊勢物語、一七・古今六帖第五、すり衣、三四一五八）〔河〕（第二句ノミ、〈岷〉）

⑧津の国のなには思はず山城のとはにあひみむ事をのみこそ（古今集巻十四、恋四、六九七、題しらず　読人しらず）〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔細〕ことをこそ思へ、

⑨人ならば母が真愛子（まなご）そあさもよし紀の川の辺の妹と背の山（万葉集巻七、一二〇九）〔拾〕

⑩流れてはいもせの山の中に落つる吉野の川のよしや世の中（古今集巻十五、恋五、八二八、題しらず　読人しらず・古今六帖第四、うらみ、三三九六一）〔大〕

13 うらむるも人やりならず（九二七2・110）

人遣の道ならなくに大方はいきうしといひていざ帰りなむ（古今集巻八、離別、三八八、山ざきより神なびの森まで送りに人々まかりて帰りがてにして別れ惜みけるによめる　源さね）〔河〕（第二句ノミ、〈孟〉）

14 よしながゐし侍らむもすさまじきほどなり（九二七7・111）

住吉とあまはつぐともながゐすな人忘れ草おふといふなり（古今集巻十七、雑上、九一七、あひ知れりける人の住吉に詣でけるによみてつかはしける　壬生忠岑・古今六帖第六、わすれ草、三四六五、躬恒、「あまはいふとも…岸におふなる」）〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

15 あさ日さすひかりをみてもたまざゝのはわけの霜をけたずもあらなむ（九二九6・113）

①笹の葉におく霜よりも独りぬるわが衣手ぞさえまさりける
（古今集巻十二、恋二、五六三、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　紀友則・友則集、一九三八・古今六帖第一、霜、三五三）
〔河〕〔孟〕〔岷〕

②玉笹の葉わきに置ける白露の今いく世へむ我ならなくに
（古今六帖第六、ささ、三四九三）〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

③いづこにか　駒を繋がむ　朝日子が　さすや岡辺の　玉笹の上に　玉笹の上に（神楽歌、日霊女歌、末、四）〔大〕〔集〕

16 いとかじけたるしたおれのしもゝおとさずもてまいれる御つかひさへぞ（九三九7・113）
こぬ人を松のえに降る白雪の消えこそ返れくゆる思ひに
（後撰集巻十二、恋四、八五二、忘れがたになり侍りける男に遣はしける　承香殿中納言・元良親王御集、三三三、かくて物もくはでなく〳〵恋ひ聞えて松に雪のふりかゝりたるにさして聞えける、「あはぬ思ひに」・古今六帖第一、雪、三六〇、「松の葉に降る」）〔拾〕あはぬおもひに

17 わすれなむと思ふも物のかなしきにいかさまにしていかさまにせむ（九三九12・113）
①あけぬとて今はの心つくからになどいひ知らぬ思ひそふらん（古今集巻十三、恋三、六三八、題しらず　藤原国経朝臣）
〔河〕わすれなむ（初句）、〔孟〕〔岷〕

②忘るれどかく忘るれど忘られずいかさまにしていかさまにせむ（清慎公集、三四〇〇、同じ人に久しく絶えて・義孝集、三四四八、同じ人に久しくたえて）〔花〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕忘れぬを、〔引〕わすれぬを…忘られぬ、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

真木柱

1 心もてあかぬさまはしるきことなれど（九三七8・119）
はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく（古今集巻三、夏、一六五、蓮の露を見てよめる　僧正遍昭・遍昭集、一八六、はちすに露のおきたるを、「などかは露を」・古今六帖第六、はちす、三四六五、ヘンぜう・和漢朗詠集巻上、夏、蓮、一八一、「にごりにそまぬ…などかは露を」）
〔孟〕

2 おりたちてくみはみねどもわたり川人のせとはたちぎらざりしを（九三八11・121）
①わび人のそぼつてふなる涙川おりたちてこそぬれ渡りけれ（後撰集巻十、恋二、六二一、題しらず　橘敏仲）〔河〕、〔湖〕
そぼつなるてふ
②わびつゝもこの世はへなむ渡り川後の淵瀬と誰に問はまし（信明集、二〇一六六、行平が三の君をたえたるころ、女）
〔拾〕〔新〕〔余〕〔大〕
③此の世をばおひもかつぎて渡してむ後は始めの人を尋ねよ（信明集、二〇一七〇、かへし）〔拾〕〔新〕〔余〕〔大〕

3 みつせ川わたらぬさきにいかでなを涙のみをのあはときえなん（九三八14・121）
みつせ川渡るみさをもなかりけり何に衣をぬぎてかくらん（拾遺集巻六、雑下、五四三、地獄のかたを書きたるを見て
菅原道雅女）〔河〕〔花〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

4 かのせはよきみちなかなるを御てのさきばかりはひきたすけきこえてんや（九三九1・121）
①忘れ川世々道なしと聞きてこそいとふの神も立ちは寄りけれ（古今六帖第三、川、三四三九）〔河〕〔岷〕よくみちなしと
きゝてしはいとふのうみの、〔拾〕〔余〕よく道なしと
②神が崎荒石も見えず波立ちぬ何処ゆ行かむ避道は無しに（万葉集巻七、一三六八）〔河〕神さきの…いづこよりゆかん、
〔岷〕神さきのあら磯もみえず波立ちていづこよりゆかん
よき道もなしといへり、〔拾〕〔余〕いづこよりゆかむ
③岡ざきのたみたる道を人な通ひそありつつも君が来まさむ避道にせむ（万葉集巻十一、三六三一）〔拾〕〔余〕

5 人ぎゝやさしかるべし（九四一1・123）
①玉島のこの川上に家はあれど君を恥しみ顕さずありき（万葉集巻三、四五四）〔河〕〔岷〕松浦河（初句）、〔孟〕松浦川…家し
あれど、〔余〕松浦なる
②何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき（古今集巻十九、雑体、誹諧、一〇四三、題しらず　読人しらず・古今六帖第四、雑の思、三三〇六）〔河〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

6 うき身のゆかりかる〳〵しきやうなるみゝなれにて侍れば（九四三11・125）
ちはやぶる神も耳こそなれぬらし様々祈るとしもへぬれば（後撰集巻十、恋三、六六〇、かへし　おほつぶね）〔拾〕

7 よもふけぬめりやとそゝのかし給（九四四14・128）

道もあらじいかでか行かむ白雪のふりおほふ竹のよも深に
けり（古今六帖第一、雪、三六〇三）〔河〕道もなし、〔岷〕〔引〕

8 いまはかぎりとゞむともと思ひめぐらし給へる気色（九四四14・
128）

吹く風に雲のはたてはとゞむともいかゞ頼まむひとの心は
（拾遺集巻十四、恋四、九〇二、題しらず　読人しらず）〔大〕

9 よそにても思だにをこせ給はゞ袖のこほりもとけなんかし
（九四五7・128）

水鳥のしたやすからぬ思ひにはあたりの水も氷らざりけり
（拾遺集巻四、冬、三七、題しらず　読人しらず）〔拾〕〔余〕

10 袖のこほりもとけなんかしなどなどやかにいひ給へり（九四
五7・128）

思ひつゝねなくに明くる冬の夜の袖の氷はとけずもあるか
な（後撰集巻八、冬、四八二、題しらず　読人しらず）〔奥〕
〔紫〕〔河〕〔細〕〔休〕〔岷〕〔湖〕〔新〕冬の夜は袖の氷の、〔異〕
冬の夜は袖の氷も、〔紹〕、〔孟〕冬の夜は袖の氷のとけも
あらなん、〔屋〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

11 なを心げさうはすゝみてそらなげきをうちしつゝ（九四五12・
129）

はかるめる言のよきのみ多けれどそらなげきをばとるにや
あるらん（金葉集巻八、恋下、五三、題しらず　読人しらず）
〔拾〕

12 おほきなるこのしたなりつるひとりをとりよせて（九四六5・
129）

たき物の木の下煙ふすぶとも我独りをばしなすまじやは
（古今六帖第五、ひとり、三四三〇）〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔湖〕
〔引〕しなすべしやは、〔岷〕われひとりやはしなすべしや
は

13 さるこまかなるはゐのめはなにもいりておぼゝれて物もおぼ
えず（九四六9・130）

さらばよと別れし時にいはませば我も涙におぼゝれなまし
（後撰集巻十九、離別、一三四三、かへし　伊勢・伊勢集、一八三〇、
かへし、「おぼほれましを」）〔余〕

14 ゆきの気色もふりいでがたくやすらひはべしに身さへひえて
なむ（九四七5・130）

涙川ながれて袖のこほりつゝさよふけゆけば身のみひゆら
ん（新撰万葉集巻上、思歌、一六）〔拾〕〔余〕

15 心さへそらにみだれし雪もよにひとりさえづるかたしきの袖
（九四七8・131）

①かつ消えて空もみだるゝあわ雪はもの思ふ人の心なりけり
（後撰集巻八、冬、四八〇、雪のすこしふる日女に遣はしける
藤原かげもと・古今六帖第一、雪、三六三、「心なるなり」）
〔河〕〔岷〕空にみだるゝ…なみだなりけり（第五句）、〔余〕空
にみだるゝ、〔事〕

②心さへ空に乱れぬ秋の夜のあかつき山の霧はらふ風（未詳）
〔河〕きりはらふ風に、〔岷〕

16 いまはかぎりとみ給に候ふ人〳〵もいみじうかなしとおもふ
（九四九6・133）

憂きながらさすがにものゝ悲しきは今は限りと思ふなりけり（元輔集、一九三七、時々まかる女にこと人まかると聞きて・清慎公集、三三四、もとすけ人知れぬことありて女を恨みて・詞花集巻八、恋下、二三五）〔余〕〔事〕

17 ひめ君はとなるともかうなるともをのれにそひ給へ（九三〇9・134）

音にきくこまのわたりの瓜作りとなりかくなりなる心かな（拾遺集巻九、雑下、三三七、三位国章ちひさき瓜を扇に置きて藤原かねのりにもたせて大納言朝光が兵衛佐に侍りける時つかはしたりければ　読人しらず）〔河〕山しろのこまのみそのゝ（真本こまのわたりの）…なる我身かな、〔休〕（第一二三四句ノミ、「山城の」）、〔孟〕〔岷〕山しろのこまのみそのゝ…なる我身かな、〔屋〕山城の…身はなりにけり

18 いまはとてやどかれぬともなれきつるまきのはしらはわれをわするな（九三一14・135）

①槇柱造る杣人いさゝめのかりほのためと思ひけむやは（古今六帖第二、そま、三八九三・万葉集巻七、一三五三、「いささめに…造りけめやも」）〔最〕〔河〕かりほのわさ田つくりけるかな、〔孟〕〔岷〕かりほのためにつくりけるかな

②思ひあまりわびぬる時は宿かれてあくがれぬべき心ちこそすれ（古今六帖第二、やど、三三七四）〔河〕〔岷〕わびしき時は

③こち吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとてはるを忘るな（拾遺集巻十六、雑春、一〇〇六、流され侍りける時家の梅の花を見侍りて　贈太政大臣菅・大鏡巻三、八八、菅原道真）

〔大〕〔評〕〔集〕

19 木ずゑをもめとゞめてかくるゝまでぞかへりみ給けるきみがすむゆへにはあらで（九三一9・136）

君がすむ宿の梢のゆく〳〵と隠るゝまでにかへりみしはや（拾遺集巻六、別、三五一、流され侍りて後いひおこせて侍りける　贈太政大臣菅）〔釈前〕〔奥〕宿の梢を…かくるゝまでもかへり見しかな、〔紫〕宿の梢を…かくるゝまでも、〔異〕〔一〕〔孟〕宿の梢を…かへり見しかな、〔河〕〔細〕〔岷〕宿の梢を、〔休〕〔紹〕〔湖〕〔引〕〔新〕宿の梢をゆく〳〵も、〔屋〕宿の梢をゆく〳〵も…帰りみしかな、〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

20 ほとりまでもにほふためしこそあれと（九三一1・137）

紫のひともと故にむさし野の草はみながら哀れとぞ見る（古今集巻十七、雑上、八六七、題しらず　読人しらず・古今六帖第五、むらさき、三四三四六、「草はなべてもなつかしきかな」）〔休〕〔紹〕、〔新〕（第一二句ノミ）

21 をのれふるし給へるいとおしみに（九三一3・137）

秋と云へばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にこそありけれ（古今集巻十五、恋五、七三四、題しらず　読人しらず）〔河〕〔屋〕

22 みにしはうなる人のゆき所あるまじきをとて（九三一3・137）

①罪もなき人をうけへば忘れ草おのが上にぞ生ふと言ふなる（伊勢物語、七九）〔河〕しのぶ草（真本忘草）、〔孟〕〔岷〕

②あしかれとおもはぬやまのみねにだに生ふなる物を人のな

げきは（和泉式部集、文庫本一六四、一六四、をとこをうらみて・詞花集巻九、雑上、三三、男をうらみてよめる　和泉式部）〔河〕〔孟〕、〔岷〕（私云此引歌不用之）

23 よしかのさうじみはとてもかくてもいたづら人とみえ給へば（九四13・139）

世の中はとてもかくても同じこと宮もわらやも果てしなければ（新古今集巻六、雑下、一六三、題しらず　蟬丸）〔余〕

24 たけがはうたひける程をみればうちの大殿のきんだち四五人ばかり（九三3・143）

竹河の　橋の　つめなるや　橋のつめなるや　花園に　花園に　はれ　花園に　我をば放てや　我をば放てや　少女（をとめ）伴（ぐ）へて（催馬楽、竹河、三三）〔引〕〔対〕

25 さも心にかなはぬよかなとうちなげきてゐ給へり（九三5・144）

せりつみし昔の人も我がことや心に物のかなはざりけん（未詳）〔河〕、〔弄〕（上句ノミ、「我がごとく」）、〔一〕我がごとく、〔休〕〔紹〕〔岷〕

26 さへづるこゑもみゝとゞめられてなんとあり（九三9・144）

もゝ千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく（古今集巻一、春上、二八、題しらず　読人しらず）〔釈前〕、〔奥〕〔休〕（第二句ノミ）、〔紫〕われぞふりぬる、〔異〕〔河〕、〔弄〕〔一〕（上句ノミ）、〔細〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

27 などてかくはひあひがたきむらさきを心にふかく思ひそめけむ（九六5・145）

①紫は灰さすものぞ海石榴市の八十のちまたに逢ひし児や誰（万葉集巻十二、三一〇一）〔河〕はひさす物を、〈弄〉〔休〕〔紹〕、〔孟〕（引歌までもなき歟）、〔岷〕、〔引〕あへるこやたれ、〔新〕

②紫にやしほそめたる藤の花いけに灰さす物にぞありける（後拾遺集巻二、春下、一三三、題しらず　斎宮女御・斎宮集、一六三三、池に藤のかゝりたるを　女御殿）〔河〕〔岷〕

③むらさきの色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる（新古今集巻十一、恋一、九三、中将の更衣に遣しける　延喜御歌）〔河〕〔岷〕、〔引〕おもひそめぬる、〔事〕

28 むかしのなにがしがためしもひきいでつべき心地なむすると　てまことにいとくちおしとおぼしめしたりきこしめしゝにも　こよなきちかまさりをはじめよりさる御心なからんにてだに　も御らんじすぐすまじきをまいていとねたうあかずおぼさる　るされどひたぶるにあさきかたにおもひうとまれじとていみ　じう心ふかきさまにの給契てなづけ給もかたじけなう我はわ　れと思ものをとおぼす（九六6・146）

①昔せし我がかねごとの悲しきはいかに契りしなごりなるら　む（後撰集巻十一、恋三、七二、大納言国経朝臣の家に侍りけ　る女に平定文いと忍びて語らひ侍りて行末までと契り侍り　ける頃此の女俄に贈太政大臣に迎へられてわたり侍りにけ　れば文だにも通はす方なくなりにければかの女の子のいつ　ゝばかりなるが本院の西の対に遊びありきけるを呼びよせ

て母に見せ奉れとてかひなに書き付け侍りける　平定文〕
〔河〕夢ぢにまどふ、〔弄〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕
〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕

②うつゝにてたれ契りけむ定めなき夢路にまよふ我はわれか
は（後撰集巻十一、恋三、七三、かへし　読人しらず）　〔河〕
〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔余〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

29 のをなつかしみあかいつべうよおしむべかめる人も身をつみて心くるしうなむ（六六三3・147）

①春の野にすみれ摘みにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける（古今六帖第六、すみれ、三四六〇、赤人集、一六六〇・万葉集巻八、四三四、山部宿禰赤人）　〔異〕〔屋〕〔引〕一夜ねにけり、〔河〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕
〔事〕〔評〕〔集〕

②身をつめば露をあはれと思ふかな暁ごとにいかでおくらむ
（拾遺集巻十三、恋三、七三〇、女に遣しける　読人しらず）
〔河〕

③春の野におふるなき名のわびしきは身を摘みてだに人のしらぬよ（拾遺集巻十三、恋三、六九八、題しらず　読人しらず）
〔余〕

30 もしほやくけぶりのなびきけるかたをあさましとおぼせど
（九六三13・148）
須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり（古今集巻十四、恋四、七〇八、題しらず・読人しらず）　伊勢物語、三〇八・古今六帖第一、煙、三六六六、「伊勢のあまの」・同第三、しほ、三三七七、「伊勢のあまの」）　〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕
〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〈細〉〔休〕〔紹〕、〔孟〕（第二句ノミ）、
〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

31 ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざらめや（九四四10・150）

①離磯（はなそ）に立てるむろの木うたかたも久しき時を過ぎにけるかも（万葉集巻十五、三六〇〇）　〔河〕、〔弄〕はなれそよ…久しき年を、〔休〕〔余〕久しき年を、〔紹〕〔孟〕〔岷〕久しき年を過ぎにけるかな、〔拾〕

②天ざかる鄙にある我をうたかたも紐解き放（さ）けておもほすらめや（万葉集巻十七、三九四九、大伴宿禰池主）　〔河〕ひもときかけて（不本真本ときさけて）、〔孟〕〔岷〕〔余〕ひもときかけて、
〔拾〕

③鶯の来鳴く山吹うたかたも君が手触れず花散らめやも（万葉集巻十七、三九六八、大伴宿禰池主）　〔河〕、〔弄〕〔休〕（上句ノミ）、〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔拾〕〔余〕

④思ひ川たえず流るゝ水の泡のうたかた人にあはで消えめや
（後撰集巻九、恋一、五一六、まかる所しらせず侍りける頃又あひしりて侍りける男のもとより日頃尋ね侘びてうせにたるとなむ思ひつるといへりけりば　伊勢）　〔河〕〔孟〕〔岷〕〔新〕
〔拾〕〔余〕

⑤うたかたも言ひつつもあるか我ならば地（つち）には落ちず空に消（け）なまし（万葉集巻十二、三六六六）　〔拾〕〔余〕つちにはおちず

⑥ながめつゝ我が思ふことはひぐらしに軒のしづくのたゆる

よもなし（新古今集巻十六、雑下、一八〇〇、秋雨を　中務卿具平親王）〔事〕

32 程ふるころはげにことなるつれ〴〵もまさり侍けり（六四10・150）

君みずて程の古屋のひさしには逢ふ事なしの草ぞ生ひける（新勅撰集巻十五、恋五、九四七、題しらず　読人しらず）〔河〕、〔休〕〔紹〕君すまで、〔屋〕きみまさで…くさおひにけり、〔岷〕

33 たま水のこぼるゝやうにおぼさるゝを（六四12・150）

①雨やまぬ軒の玉水数しらず恋しきことのまさるころかな（後撰集巻九、恋一、五九、人につかはしける　兼盛）〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

②ながれ行く末せきとむる玉水のこぼれもあへず落つる涙か（未詳）〔異〕〔河〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕

34 あづまのしらべをすがゝきてたまもはなかりそとうたひすさび給も（六五4・151）

①鴛鴦（おし）　たかべ　鴨さへ来居る　蕃良（はら）の池の　や　玉藻はま根な刈りそや　生ひも継ぐがにや　生ひも継ぐがに（風俗歌、鴛鴦、四）〔釈前〕乎志多加戸ハ加毛佐戸支井留波良乃伊介乃也多万毛波万禰奈加利曽於比毛須加禰也万禰奈利曽也、〈釈書〉〔奥〕乎志多加戸加毛左戸支井留波良乃伊介乃也多末毛波万禰奈加利曽於比毛須加禰也万禰奈加利曽也、〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〈拾〉〔玉〕〈余〉〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

②原の池に生ふる玉藻のかり初めに君を我が思ふものならなくに（古今六帖第三、池、三五九）〔拾〕〔新〕〔余〕〔集〕

③我が背子が老ゆるが惜しささたの池の玉藻にもがなかりみはやさむ（古今六帖第三、池、三五二）〔拾〕〔新〕〔余〕

35 あかもたれひきいにしすがたをとにくげなるふるごとなれど（六五6・151）

①立ちて思ひゐてもぞ思ふ紅の赤裳たれひきいにし姿を（古今六帖第五、裳、三四一九・万葉集巻十一、二五七〇、「赤裳裾引き」・新勅撰集巻十四、恋四、九四三）〔釈前〕ゐつゝぞ思ふくれたけの、〔奥〕〔紫〕〔異〕、〔河〕〔一〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕わぎも子が（第三句）、〔細〕、〔休〕〔紹〕起きてぞ思ふわぎもこが、〔引〕〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

②阿胡（あご）の浦に船乗りすらむ娘子（をとめ）らが赤裳の裾に潮満つらむか（万葉集巻十五、三六一〇）〔河〕〔孟〕舟のりすらしわぎもとが

36 いろに衣をなどの給て　思はずにいでのなかみちへだつともいはでぞこふる山ぶきのはな（六五14・151）

①かたみなる色にころもはなりぬれど花の香はよにつねならなくに（未詳）〔釈前〕花のうきはに、〔釈書〕色にころもゝなりぬれど…つねならぬかな、〔奥〕なりぬれば、〔紫〕、〔異〕なりぬれば花のうきはに、〔河〕〔一〕〔休〕〔孟〕〔岷〕

②いはぬまをつゝみし程に梔子の色にやみえし山吹のはな（後拾遺集巻十八、雑四、一〇九四、近き所に侍りけるに音し侍らざりければ村上の女三宮の許より思ひへだてけるにや花心にこそなどいひおこせたる返事に　規子内親王）〔奥〕〔紫〕

〔異〕

③くちなしの色に衣をそめしよりいはで心に物をこそ思へ（古今六帖第三、くちなし、三四三六）〔河〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕、〔拾〕〔余〕（第二句ノミ）、〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕

④山吹を屋戸に植ゑては見るごとに思ひは止まず恋こそまされ（万葉集巻十六、四一八六・家持集、一五七二、「宿に植ゑつゝ見る時は」）〔河〕〔休〕〔孟〕〔岷〕、〔引〕おもひやはする

⑤思ふとも恋ふとも言はじくちなしの色に衣を染めてこそきめ（古今六帖第三、くちなし、三四三四）〔弄〕〔細〕〔孟〕〔湖〕

山吹の（第三句）、〔紹〕山吹の…染めてきなまし、〔岷〕、〔屋〕こふともあはじ山吹の、〔引〕、〔拾〕（上句ノミ）、〔余〕（第二句ノミ）、〔事〕〔評〕〔集〕

⑥味気なく思ひこそやれつれ〴〵と一人やゐでの山吹の花（後拾遺集巻十六、雑二、九六三、おなじ人のもとよりきたりときゝておなじ花につけてつかはしける　和泉式部）〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

37 かほにみへつゝなどの給もきく人なし（九六六1・152）

①いはぬまをつゝみし程にくちなしの色にやみえし山吹のはな（後拾遺集巻十六、雑四、一〇九四、近き所に侍りけるに音し侍らざりければ村上の女三宮の許より思ひへだてけるにや花心にこそなどいひおこせたる返事に　規子内親王）〔河〕〔孟〕〔岷〕

②夕されば野べになくてふかほ鳥の顔に見えつゝ忘られなくに（古今六帖第六、かほどり、三三三〇）〔河〕、〔弄〕（第二句ノミ）、〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

③高円の野辺の容花面影に見えつつ妹は忘れかねつも（万葉集巻八、一六三〇、大伴宿禰家持）〔岷〕〔湖〕

38 かりのこのいとおほかるを御らんじて（九六六3・152）

①卵のうちに命こめたる雁のこは君がやどにてかへらざらなん（うつほ物語、藤原の君）〔河〕、〔孟〕かのうちに、〔岷〕

②芦根はふうきねにすだく鴨のこは親にまさると聞くはたのもし（未詳）〔休〕、〔紹〕〔岷〕うきぬにすだく、〔孟〕

39 すがくれてかずにもあらぬかりのこをいづかたにかはとりかくすべき（九七七1・153）

すがくれてふけ井の浦にありし石はおひの波にぞあらはれにける（未詳）〔異〕

40 興津ふねよるべなみ路にたゞよはゞさほさしよらむとまりをしへよ（九九九9・156）

みるめ刈る潟やいづこぞ棹さして我に教へよ蜑の釣舟（伊勢物語、一四・新古今集巻十一、恋一、一〇八〇、題しらず　業平朝臣）〔河〕〔岷〕

41 たなゝしをぶねこぎかへりおなじ人をやあなはるやといふを（九九九9・156）

堀江こぐたななし小舟こぎ返り同じ人にや恋ひわたりなむ（古今集巻十四、恋四、七三二、題しらず　読人しらず・古今六帖第三、江、三三二二、「入江漕ぐ…同じ人のみ思ほゆるかな」）〔釈前〕いりえこぐ…おなじ人をや恋わたるべき、〔釈書〕

入江ゆく…とき返しもとの人をも恋わたるべき、〔奥〕〔河〕おなじ人をや恋わたるべき、〔紫〕ほりにこぐ…おなじ人をやこひわたるべき、〔異〕いりえこぐ…おなじ人をやこひんと思ひし、〔一〕〔第二句ノミ〕、〔休〕、〔紹〕〔壬西〕〔湖〕〔新〕恋わたるべき、〔屋〕、〔岷〕おなじ人をや恋わたるらん、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

桜人

1 こけのたもとはけさはそぼつるとよみてなをたちかへる
いにしへに猶たち返る心かな恋しきことにもの忘れせで
〔古今集巻十四、恋四、ヱ三四、貫之・貫之集、二三七九・古今六帖第五、昔をこふ、三三七三三、貫之〕〔釈前〕〔異〕

2 こひをしこひは
種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひはあはざらめやは〔古今集巻十一、恋一、五三、題しらず　読人しらず・古今六帖第五、としへていふ、三三四〇三、「生ひぬるを」〕〔釈前〕〔異〕

3 われやかはらぬ
えぞ知らぬ今こころみむ命あらば我や忘るゝ人やとはぬと
〔古今六帖第四、雑の思、三三九二・古今集巻八、離別、三七七、紀のむねさだがあづまへまかりける時に人の家に宿りて暁いでたつとてまかり申しければ女のよみて出せりける　読人しらず〕〔釈前〕〔異〕

4 わかれせましやとおしみきこゆ
暁のなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや
〔後撰集巻十三、恋四、八六三、人の許より帰りて遣はしける　貫之・拾遺集巻十二、恋三、七五五、題しらず　貫之・和漢朗詠集巻下、暁、四二〇〕〔釈前〕〔異〕

5 はれずやきりの
しら雲のかゝるおかべのすみかにははれずや霧の立ちわた

るべき（未詳）〔釈前〕〔異〕

6 道をさへせくこそ
かゝらでも雲井のほどはなげきしにみちをさへせくやまぢなるらん（未詳）〔釈前〕〔異〕

7 ゆふがほの御手のいとあはれなれば跡はちとせもはかなくもふみとゞめけるはまちどりあとはちとせのかたみなりけり（未詳）〔釈前〕〔異〕

8 われさえ心そらなりとうちわらひ給てあやしつまゝつよひなりや
おほぞらをひとりながめてひこぼしのつまゝつよさえひとりかもねん（未詳）〔釈前〕〔異〕

9 宮はあふをかぎりになげかせ給
我が恋は行方もしらずはてもなしあふを限りと思ふばかりぞ（古今集巻十二、恋二、六二一、題しらず　躬恒・古今六帖第四、恋、三八三五・和漢朗詠集巻下、恋、七七七）〔釈前〕〔異〕

10 などせしわざぞ
うきしまやうきたびごとになそしまやなぞせしわざぞ心づくしに（未詳）〔釈前〕〔異〕

11 みづにやどれる
手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にこそありけれ（拾遺集巻二十、哀傷、一三三、世中心ぼそく覚えて常ならぬ心ちし侍りければ公忠朝臣のもとによみて遣はしける、このあひだ病重くなりにけり　紀貫之・貫之集、一八〇九三）〔釈前〕〔異〕

梅枝

1 八条の式部卿の御ほうをつたへてかたみにいどみあはせ給ほど（九七六2・160）
春くれば宿にまづさく梅の花君が千歳のかざしとぞ見る（古今集巻七、賀、三五二、もとやすのみこの七十賀のうしろの屏風によみてかきける　紀貫之・古今六帖第四、かざし、三二六八、貫之）〔紫〕〔異〕

2 おまへちかきこうばいさかりに色もかもにるものなきほどに（九七六9・161）
降る雪に色はまがひぬ梅の花かにこそ似たる物なかりけれ（拾遺集巻一、春、一四、同じ御屏風に　躬恒・躬恒集、一三九一・古今六帖第六、梅、三九八一）〔異〕

3 ちりすぎたる梅のえだにつけたる御文もてまひれり宮きこしめすこともあればいかなる御せうそこのすゝみまいれるにかとておかしとおぼしたればほゝゑみていとなれ〳〵しきこときこえつけたりしを…花の香はちりにし枝にとまらねどうつらむ袖にあさくしまめや（九七六13・161）
春過ぎて散りはてにける梅の花ただかばかりぞ枝に残れる（拾遺集巻十六、雑春、一〇六三、ひえの山に住み侍りける頃人のたき物をこひて侍りければ侍りけるまゝにすこしを梅の花のわづかに散り残りて侍る枝につけて遣はしける　如覚法師・高光集、一九四九四、比叡の山にすみ侍る頃人のたき物

を乞ひて侍りければはべりけるまゝに梅の花の僅にちり残りけるにつけて遣すとて、「春立ちて散りはてにけり」・小大君集、一六八四、多武の峯にある大とこのさり会の香炉にいれむとて梅花方さぶらふなるしばし給はらむと申したりければ、「春風に散りはてにけむ」〔異〕ちりはてにけり、〔河〕ちり残りける、〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕ちりすきにける、〔新〕〔事〕〔大〕

4 花の香はちりにし枝にとまらねどうつらむ袖にあさくしまめや（九七七6・162）

蟬の羽のよるの衣はうすけれど移り香こくも匂ひぬるかな（古今集巻七、雑上、八七六、方たがへに人の家にまかれりける時にあるじのきぬを着せたりけるをあしたに返すとてよみける　紀友則・友則集、一九三四、人のもとよりとのゐ物おこせたりけるを返すとて、「なりにけるかな」第五句）

〔一〕匂ひける哉

5 花のえにいとゞこゝろをしむるかな人のとがめむ香をばつゝめど（九七七13・162）

①梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける（古今集巻一、春上、三三、題しらず　読人しらず・兼輔集、一六三九、いと忍びたる移香の人しるばかりありければその女に、「香にぞしみぬる」）〔異〕〔孟〕〔岷〕香にぞしみぬる、〔河〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔事〕〔大〕〔集〕

②梅の花香をふきかくる春風にこゝろをそめば人やとがめむ（後撰集巻一、春上、三一、題しらず　読人しらず）〔河〕〔休〕〔孟〕〔岷〕

6 たれにかみせんときこえ給て御ひとりどもめしてこゝろみさせ給しる人にもあらずやとひげし給へど（九七八7・163）

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞ知る（古今集巻一、春上、三八、梅の花を折りて人におくりける　友則・友則集、一九四九、梅の花折りて人にやるとて・信明集、二〇一四、かへし・和漢朗詠集巻上、春、紅梅、一〇〇、友則）〔釈前〕、〔奥〕〔上句ノミ〕、〔紫〕〔異〕〔河〕、〔細〕（第二四五句ノミ）、〔休〕〔孟〕（第二二句ノミ）、〔紹〕〔屋〕〔岷〕、〔湖〕（第一二四五句ノミ）、〔新〕（初句ノミ）、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

7 冬の御かたにもときどきによれるにほひのさだまれるにけたれんもあいなし（九七九10・164）

①香をとめて誰折らざらむ梅の花あやなし霞立ちな隠しそ（拾遺集巻一、春、一六、斎院の御屏風に　躬恒・躬恒集、一五三〇、同じ十五年斎院の御屏風の歌、春・古今六帖第六、梅、三四九六、躬恒）〔紫〕、〔異〕色とそみえねかやはかくるゝ

②春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ（古今集巻一、春上、四一、春の夜梅の花をよめる　躬恒・古今六帖第六、梅、三四九九、躬恒・和漢朗詠集巻上、春、春夜、二八）〔紫〕

8 弁の少将ひやうしとりてむめがえいだしたるほどいとおかし（九八〇9・165）

①梅が枝に　来居る鶯　や　春かけて　はれ　春かけて　鳴

けどもいまだ　や　雪は降りつつ　あはれ　そこよしや
雪は降りつつ（催馬楽　梅が枝、二八）〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕
介於天仁波礼ニ者留加計仁由支波不宇利川ゝニ安波礼曽於
己与之也由支波不利宇利ッゝ、〔奥〕无女加江尓支ゐ留う久
比春也波留加介天波礼は留加計天名計止毛伊万太也由支
波不利川ゝ安波曽己与之也由支波不利川ゝ、〔異〕＜河＞
＜一＞〔紹〕＜孟＞〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕
〔評〕〔集〕

②梅が枝にきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ
（古今集巻一、春上、三、題しらず　読人しらず・古今六帖第六、うぐひす、三三四）〔紫〕〔異〕

9 わらはにてゐんふたぎのおりたかさごのうたひし君なり（六〇9・166）
高砂の　さいさごの　高砂の　尾上に立てる　白玉　玉
椿　玉柳　それもがと　さむ　汝もがと　汝もがと　練緒
染緒の　御衣架にせむ　玉柳　何しかも　さ　何しかも
何しかも　心もまたいけむ　百合花の　さ百合花の　今朝
咲いたる　初花に　あはましものを　さゆり花の（催馬楽、
高砂、三）〔対〕

10 うぐひすのこゑにやいとゞあくがれんとゝろしめつる花のあたりに（六〇13・166）
いつまでか野べに心のあくがれむ花し散らずは千代も経ぬべし（古今集巻二、春下、六六、春の歌としてよめる　素性・古今六帖第一、仲の春、三〇九三、素性・素性法師集、一三七二、春の歌よみてと人のいふに）〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕
〔河〕〔一〕、〔細〕〔第四句ノミ〕、〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕
〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

11 鶯のねぐらのえだもなびくまでなをふきとをせよはの笛竹（六一3・166）
花のいろはあかず見るとも鶯のねぐらの枝に手ななふれそも（拾遺集巻十六、雑春、一〇〇六、天暦の御時台盤所のまへに鶯のすを紅梅の枝につけて立てられたりけるを見て　一条摂政）
〔異〕手ななふれども、〔河〕〔岷〕ねぐらの竹に、〔休〕花の色を…ねぐらの竹にてをなふれそも、〔紹〕花の色をあかず
みるらん…ねぐらの竹に手をなふれそも、〔孟〕〔引〕〔余〕

12 花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとがめむ（六一9・167）
朝毎にみし都路の絶えぬればことのあやまりにとふ人もなし（後撰集巻十六、雑四、一三五五、たよりにつきて人の国のかたはらに侍りて京に久しうまかりのぼらざりける時に友だちに遣しける　読人しらず）〔河〕〔孟〕たゝなればことあ
やまりに、〔余〕

13 しろきあかきなどけちえんなるひらは（六八五13・172）
なかなかに君に恋ひずは比良の浦の白水郎ならましを玉藻刈りつつ（万葉集巻十一、二七四三・古今六帖第三、あま、三六三一）
〔河〕君がこひずは、〔孟〕＜岷＞

14 み給ふ人のなみださへ水ぐきにながれそふ心地して（六七2・173）

①なき人の書き留めけむ水茎は打見るよりぞ流れそめける
（伊勢集、一八四六、故式部卿宮の御手にて書き給へる物を見て）〔河〕〔休〕〔岷〕かきとゞめける水ぐきをみるに涙の流れぬるかな、〔孟〕かきとゞめける水茎をみるも涙のながれぬるかな、〔引〕〔拾〕〔新〕かきとゞめける水茎をみるに涙の流れけるかな

②古のなきにながるゝ水茎の跡こそ袖の浦によりけれ（斎宮集、一六四九、御かへし・新古今集巻八、哀傷、八〇七、かへし女御徽子女王、「水茎は」）〔拾〕

15 しどろもどろにあひぎやうづきみまほしければ（九七五・173）
よしとてもよきなもたゝずかるかやのいさみだれなんしどろもどろに（未詳）〔紫〕〔異〕〔河〕、〔孟〕なき名はたゝず、〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕まめなれどよき名はたゝず

16 おさ〳〵みはやすまじきにはつたふまじきを（九八九・175）
山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそわれ見はやさむ（古今集巻二、春上、一三、題しらず　読人しらず）〔拾〕〔余〕

17 心づからたはぶれにくきおりおほかれど（九九12・176）
ありぬやと試みがてら逢ひ見ねば戯れにくきまでぞ恋しき（古今集巻十六、雑体、誹諧、一〇二五、題しらず　読人しらず）〔釈前〕、〔奥〕（上句ノミ）、〔紫〕〔異〕〔河〕＜弄＞〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

18 さるまじきことに心をつけて人のなをもたてみづからもうらみをおふなむつるのほだしとなりける（九九13・177）
①世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ（古今集巻十六、雑下、九五五、おなじ文字なき歌　物部よしな）〔最〕

②やま風のはなの香かどふ麓には春の霞ぞほだしなりける
（後撰集巻二、春中、一三、寛平の御時花の色霞にこめて見せずといふ心をよみて奉れとおほせられければ　藤原興風・興風集、一六六四、「花の香さそふ」・古今六帖第一、霞、三一八三、「花の香にほふ」）〔最〕花のかさそふたもとには

19 はづかしううき身とおぼししづめどうへはつれなくおほどかにてながめすぐし給（九九17・178）
①芦ねはふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を
（拾遺集巻十四、恋四、八九三、題しらず　読人しらず・古今六帖第三、うき、三五四四）〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔事〕〔集〕

②蓮葉の上はつれなき裏にこそ物あらがひはつくといふなれ
（後撰集巻十三、恋五、九〇四、せをそこ通はしけれどもまだあはざりける男をこれかれあひにけりといひ騒ぐをあらがはざなりと恨み遣はしければ　読人しらず）〔引〕

20 たがまことをかとおもひながらよなれたる人こそ（九九19・178）
いつはりと思ふものから今さらにたがまことをか我は頼まむ（古今集巻十四、恋四、七三、題しらず　読人しらず・拾遺集巻十五、恋五、九三三、題しらず　読人しらず・古今六帖第四、雑の思、三三九三）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕＜弄＞〔一〕、〔細〕我ぞたのまん、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕